

◆ 立川都税事務所長賞 ◆

「災害大国、日本の税金」

調布市立調布中学校 3年 塚松 心花

今年の元日、石川県の能登半島で地震が発生した。マグニチュード七・六、最大震度七。お正月の人々の賑わいの中、悲劇がもたらされた。激しく長い横揺れ、倒壊する建物、街を飲み込む大津波、恐怖に怯える人々。多くの死傷者と甚大な被害が出る痛ましい出来事が起きた。

この衝撃がテレビで流れているのを見ているとき、住民の救助や捜索にあたる警察官や消防隊員、自衛隊員の姿が私の目に止まった。地元や全国から駆けつけた大勢の隊員たちが、雪が積もる極寒の中、一変してしまった被災地で懸命に活動していた。救助活動によって地震発生から百二十四時間たった夜、がれきの下から奇跡的に救われた命もあったそうだ。

私たちの日々の安全を守っている彼らだが、このような災害時にも活躍してくれる。そして、社会に欠かせない存在となっている警察、消防、自衛隊などは、私たちの税金によって成り立っている。もしも税金がなかったら、私たちは毎日を不安な気持ちで生きることになり、災害が起きたときも、助かるはずの命が助からない。このように重要な役割を担っている税金は、救助活動の他にも様々な形で被災地を支えている。

例えば、被災地に送られる支援物資や災害後の復興などがある。がれきの撤去から始まり、避難生活の支援、公共施設の復旧、防潮堤の建設。それだけでなく、被災者の心を癒やしたり、暮らしを支えることも復興には欠かせない。災害と税金との関係を調べることで、私たちが納めた税金が、被災した人々の役に立っていることがよくわかった。

病院で生まれたときから、きれいな水があり、街が整備されている。成長すると学校に入学し、今、私は中学校で友達と勉強している。今までの私の人生の中でずっと、税金は普通の生活に当たり前のように溶け込んでいた。そのため、これまで税金について意識して考えたことはなかった。でも、能登半島地震をきっかけに、税金の大切さについて考え、目で見えて実感することができた。普段なんとなく不満に思いながら税金を払っている人が、税金の意味をきちんと理解して納税するようになることは、その人にとっても、社会にとっても大事なことだと思った。

日本は災害大国だ。常に自然災害と隣り合わせである。この夏も台風10号が日本列島に上陸した。災害自体を防ぐことはできないが、税金を通して、私たちは繋がり、互いに助け合うことはできる。もしかしたら、私が納めた税金が未来の自分や子どもたちを救うかもしれない。大人になったら、社会の一員としてきちんと責任を果たし、税金という名のバトンを未来へ繋いでいきたいと思う。